

あいち国際女性映画祭 2015

デイリーニュース vol.6 (2015/9/6)

昨日のトークから

『第三の男』&特別講演「すべての始まり、“第三の男”」 字幕翻訳者 戸田奈津子さん

「この世界に入ったのもすべては『第三の男』のせい。もう50回は観ている映画です。映画のエレメントである、カメラワーク、音楽、プロット、芝居、俳優、すべてがパッケージされていて、当時、日本中の映画ファンが惚れ込んだ映画です」と熱く語られ、字幕の世界に興味を持ったことを明かされました。「昔は、今の時代のようにテレビやDVDでまたいつでも同じ映画を観ることはできませんでした。一生で、今、この瞬間しか観られない。今日限りなんだと思って観ていました。死んでゆく人を見守るような気持ちで食い入るように映画に没頭していました」と中学生だった当手を振り返っていた戸田さん。そして、CGなど技術が進歩していく中、「映画の形は変わっていくけれど、心を打つものはいつの時代も変わらない」とシリーズものや続編が多い今の映画業界にもっとオリジナル作品が増える事を願っていらっしゃいました。



『共に生きて』 音楽 光永龍太郎さん 脚本家 吉田香里さん



残念ながら光永憲之監督は入院中でトークに参加していただけなくなり、代理として光永監督と槇坪亨鶴子監督のご長男で本作の音楽・編集を担当された龍太郎さんと脚本の吉田香里さんが登壇されました。企画の最初から関わった吉田さんは「夫婦史なので光永監督の反省もつい入れたくなる所を、二人の監督と私で話し合い、時にはケンカして削ってですね(笑)、シンプルに、けれどドラマチックにまとめました」、「最初は台本で60ページ以上あったのを45ページほどにしました。父と母の事実関係に絞り、主観的なところや、父と祖父のことや母の最初の子どもへの思いなどをカットし、淡々と二人の夫婦関係に集中するようにしたのです」と龍太郎さんが付け加えます。槇坪監督は一言でいうとどんな方という質問に「すごい人です。子どもの頃は家にはいないので寂しかったのは事実ですが、晩年になって講演に同行するようになり、母の生い立ちや人生を語る姿や夫婦で共に必要とし合い、生かし生かされる関係になった両親を見てきました。二人の思いを僕の8歳の娘にも伝えていかなければいけないなど、映画を見直しては思っているところです」と答えていらっしゃいました。

『接吻泥棒』『あらくれ』 映画評論家 斉藤綾子さん



「私はもともと女性をバカにする感じがしてキヤットファイトという言葉が嫌いでした。けれど映画を学ぼうと、それは男性社会を批判することが目的ではないかと思い始めたのです。そこで、この2本です。まず『接吻泥棒』は男に翻弄されているように見えて女たちが欲しいものを手に入れるスクリーンボールコメディで、川島監督はスターやメディア、マッチョで女嫌いの原作者をおちょくっています。一方『あらくれ』は、ダメ男を描かせたら天下一品の成瀬監督らしい映画です。高峰秀子が本人とは全く性格の違うたくましい生命力のあるヒロインを演じています。ヒロインは夫の浮気相手と乱闘を繰り広げた挙句、職人をひきつれて夫の店を出る決意をし、一人で歩み去ります。この2本からも考えられるのはキヤットファイトとは、女らしさの押しつけを破壊し、抑圧されたヒロインがエネルギーを発散して自分を解放し、同時に女性観客を解放する行為なのではないでしょうか。そして男性にのみ開かれていたケンカやアクションを女性に対して開発した表現ではないかと思いません。そう思っているとキヤットファイトの新しい面白さが感じていただけるのではないのでしょうか。」

今日のプログラム

4階 ウィルホール

10:00~ 『愛する人へ』

12:30~ 『ふしぎな岬の物語』 *吉永小百合さんトーク

16:10~ 『ドラゴン・ガール』

3階 大会議室

10:00~ 『シアター・プノンペン』

13:30~ 『ギフト』

フィルム・コンペティション

講 評：木全純治 映画祭ディレクター

映画には大切なことが3つあります。それは、テーマ性、ストーリー展開、そして技術力です。今回のコンペティションでは、この3点をもとに、短編作品は長編制作の足がかりとなるような水準であるか、長編作品は映画館での一般公開レベルの水準であるかという観点から受賞作品を決定しました。

長編部門では、グランプリの『彦とベガ』は審査員の多数が賛同し決まりました。若い監督がベテラン俳優をうまく起用していること、認知症という暗くながちなテーマながら、認知症になった主人公のきらめきを表現したストーリーで意外性があることが高く評価されました。

意見が分かれたのが準グランプリで、男性審査員は『養女物語』を、女性審査員は『I AM THE PEOPLE』を推しましたが、前者がいわゆる伝統的な中国映画であるのに対し、後者はアラブの春の影響を受けた田舎の庶民の生活という今まであまり知られていない題材であることから、準グランプリに決定しました。

短編部門では、『きつね憑き』は早い段階でグランプリに決まりました。原作を8分間に凝縮し、子供の愛情に親が応えていく内容で、簡潔ながらも感動深い作品になっていることが高く評価されました。

準グランプリでは、『FRESH MINT』が審査員から多くの票を獲得しました。子役の演技の上手さもありますが、テーマ性、ストーリー展開、技術力の平均が取れています。また、『笑門来福』はストーリー展開が巧みで、『Ctpax(不安)』と争いましたが、『Ctpax(不安)』は不倫というテーマがありがちなのに対し、『笑門来福』は喜劇とペースが融合した作風で、今後に期待が持てるということで準グランプリとなりました。

今回のコンペティションでは、短編55本、長編14本の応募がありました。本日、『0.5ミリ』のゲストでお越しいただいた奥田瑛二さんもおっしゃっていましたが、映画制作はワンダーランドです。予算的に厳しい現場ではありますが、ワンダーランドな気分を味わい、自分たちの思いを伝えて、共感する作品を作り続けて欲しいと思います。

今回、このコンペティションにご参加いただいた皆さんは、さらに努力をしていただいて、この映画祭をきっかけに世界へ羽ばたいて行ってください。

9月4日(金)の授賞式にて



まつかわゆまの耳寄り情報

最終日になりました。デイリーニュースを読んでくださってありがとうございます。ご挨拶が遅れましたが、映画ライターのみつかわです。このコーナー、いきなり「まつかわゆまの」と言われて誰だ?!と思われた方も多かったのではないですか(笑)。

さて、私は初めてこの映画祭に参加しましたが、大変興味深いものでした。30年前、東京国際映画祭の企画で国際女性映画祭が始まった時、わざわざ“女性”と冠の付かない時代が来ればいいのにとよく言われました。

しかし、現在でもやはり女性しか取り上げない主題や女性の視点が必要な題材というものが存在します。デジタル時代になって映画製作が機材的・技術的に容易になったので、映画新興国の女性映画人によるインディ映画の製作も盛んになり、新興国の女性ならではの問題や悩み、女性の歴史など取り上げる作品が作られるようになりました。国内外の短長編、ドキュメンタリーと劇映画、ジャンルや形態にこだわらず、その貴重な発表の場がこの映画祭なのです。6日間、多くの経験をさせていただきありがとうございました。

あいち国際女性映画祭2015を振り返って

あいち国際女性映画祭2015も、いよいよ今日が最終日です。20回を記念して、今回創設した「アジア・ムービーインパクト」では、アジア7か国から9作品を上映し、そのうちカンボジア、ベトナム、ブルネイの映画を上映するのは当映画祭では初めてでした。また、今回から実施した長編フィルム部門のコンペティションでは、日本映画『彦とベガ』が初代グランプリに輝きました。

「アジア・ムービーインパクト」とフィルム・コンペティションは、これからの「あいち国際女性映画祭」の二本柱となって、当映画祭の発展を支えていくものと期待しております。

今、あいち国際女性映画祭は、日本で唯一の国際女性映画祭です。男女共同参画社会を目指す映画祭として、今後も努力してまいりますので、一層のご支援をお願いします。

* インターンの感想 *

映画祭期間中に発行していたデイリーニュースは、映画ライターまつかわゆまさんと一緒に私たちインターン7人が作成していました！一生懸命作ったものを多くの方々に見ただけで感謝しております。多くのゲストのお話を聞く事ができて、とてもいい経験になりました。

南山大学外国語学部 早川明穂 南山大学法学部 玉腰梨帆 南山大学経済学部 牧野沙映 中央大学法学部 多田瑞生
椋山女学園大学文化情報学部 田中なみ 椋山女学園大学文化情報学部 富田一花 愛知淑徳大学交流文化学部 水野愛